

寒 山

入矢義高注

日本財團支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

編集・校閲

吉川幸次郎

小川環樹

中國詩人選集 5

昭和三十三年四月二十一日 第一刷発行 ©
昭和三十六年十一月十五日 第二刷発行

定価二二〇円

注 者 入 い 矢 や 義 ぎ 高 たか

発行者 東京都千代田区神田一ツ橋二丁目三番地
岩 波 雄 二 郎

印刷者 東京都青梅市根ヶ布三八五番地
山 田 一 雄

発行所

東京都千代田区
神田一ツ橋二ノ三
株式会社

岩 波 書 店

落丁本・乱丁本はお取替いたします



寒山拾得图 梁楷笔

寒山詩集

豐干拾
得詩附

重巖我卜居鳥道絕人迹庭際何所
有白雲抱幽石住茲凡幾年屢見春
冬易寄語鍾鼎家虛名定無益

凡讀我詩者心中須護淨慳貪繼日
廉諂曲登時正驅遣除惡業歸依受
真性今日得佛身急急如律令

宋版寒山詩集（宮內序書陵部藏）

目次

解 説	七	憶う昔し過逢せし処	七
父母 続經多し	三五	鳥弄ずりて情堪えず	三八
茅棟 野人の居	二六	出生 三十年	四〇
少小より経を帯びて鋤く	二七	寒山の道を登陟れば	四二
蹭蹬たり諸もろの貧士	二八	白雲 嵯峨に高く	四三
一人 好き頭肚	三〇	独り重巖の下に臥す	四四
吁嗟 貧にして復た病む	三三	ト扱す幽居の地	四五
昔時は可かに貧なりしが	三三	層層として山水秀で	四六
我れ村中に在って住めば	三三	寒山 幽奇多し	四七
我れを笑う 田舎児	三四	以も我が棲遲の処は	四八
何を以てか長に惆悵する	三五	山中 何ぞ太はだ冷やかなる	五〇
		笑うべし寒山の道	五一

人 寒山の道を問うも 五
 時人 雲路を尋ねるも 五
 自から平生の道を楽しむ 五
 粵に寒山に居みてより 五
 昨夜 郷に還るを夢み 五
 一たび寒山に向つて坐してより 五
 独坐して常に忽忽 五
 我れ聞く天台山 六
 去年 春鳥鳴く 六
 黙黙として永く言うこと無くんば 六
 志を秉つて巻くべからず 六
 偃息す 深林の下 六
 目を極めて長望すれば 六
 寒巖 深くして更に好し 六
 客 寒山子を難ずらく 七

時の人 寒山を見て 三
 自ずから見る天台の頂 三
 智者よ 君は我れを抛うち 三
 歳去つて愁年を換え 三
 聞道く愁い遣り難しと 三
 今日 巖前に坐すれば 三
 千雲万水の間 三
 高高たる峰頂の上 三
 徒らに蓬門を閉ざして坐し 三
 楽しみ有らば且く須らく楽しむべし 三
 人生 百に満たざるに 三
 二儀 既に開闢して 三
 生死の譬えを識らんと欲せば 三
 城中 蛾眉の女 三
 花上の黄鶯子 三

君看よ 葉裡の花	九	家は緑巖の下に住す	一〇
董郎 年少き時	一〇	安身の処を得んと欲せば	一一
雍容たる美少年	一一	重巖に我れト居す	一二
徒らに勞して三史を説き	一二	寒山に躲虫あり	一四
書判 全く弱れるに非ざるに	一六	人生 塵蒙に在り	一五
書を読むも豈に死を免れんや	一七	常て聞く 漢の武帝と	一六
一たび書劍の客と為り	一八	白鶴 苦桃を銜え	一七
尋思す少年の日	一九	昨う雲霞觀に到りしに	一九
妾は邯鄲に在って住む	二〇	棲遲す寒巖の下	二三
三月 蚕は猶お小さし	二〇	三五の癡かなる後生	二四
群女 夕陽に戯むる	二〇	心高くして山嶽の如く	二五
洛陽 女兒多し	二五	食を説くとも終に飽かず	二七
春女 容儀を銜い	二六	水清く澄澄として瑩らかに	二九
人あり山陁に坐す	二七	余が家に一窟あり	三〇
山客 心悄悄たり	二九	寒山に一宅あり	三三

我れ今 一襦あり	一四
賢士は貪婪ならず	一五
騾馬 珊瑚の鞭	一六
桃花 夏を經んと欲するも	一七
浩浩たり黄河の水	一八
田家 暑を避くるの月	一九
汝 修道者に報ず	二〇
我れ人の経を転ずるを見るに	二一
寒山には唯だ白雲のみ	二二
閑自に高僧を訪ぬるに	二三
杳杳たり寒山の道	二四
馬を驅せて荒城を度ぐれば	二五
莊子 送終を説いて	二六
死生 元と命あり	二七
誰が家か長しえに死なざらん	二八

竟日 常に醉えるが如し	二九
昨う河辺の樹を見しに	三〇
一りの餐霞子あり	三一
若し常に快活なるものを論ずれば	三二
東廠に向かつて去らんと欲してより	三三
天生 百尺の樹	三四
樹あり林に先だつて生ず	三五
沙を蒸して飯と作さんと擬し	三六
身あるか与た身なきか	三七
一生 作すに慵懶し	三八
我れ凡愚の人を見るに	三九
我れ世間の人を見るに	四〇
儂家暫し山を下りて	四一
我れ人を謾むく漢を見るに	四二
世間の事を推尋するに	四三

噴噴として魚肉を買い	一六
新穀 尚お未だ熟せず	一七
富児 高堂に会す	一八
人の悪を攻むることを須いず	一九
或いは行を銜う人あり	二〇
快よき哉 混沌の身は	二一
古しえより諸もろの哲人も	二二
世間 一等の流	二三

我れ出家の人を見るに	二四
女を養むは太はだ多きを畏る	二五
吾が心は秋の月に似たり	二六
寒山 此の語を出だすに	二七
下愚 我が詩を読めば	二八
家に寒山の詩あらば	二九
跋	三〇
吉川幸次郎	三一

解 説

寒山という人物の名は、その分身である拾得とともに、古くから我が国の人人にも知られている。しかしそれは、一般的にいつて、もっぱら画題の人物として、或る固定化された印象の上での親近感だったように思われる。大まかにいつて、物外に超然とした隠者として、しかも何かふしぎな奇矯さをもった変り者として、漠然と印象づけられてきたようである。例えば曾我蕭白の描いた寒山拾得の像などは、この画家の強烈な個性に裏うちされてはいるにせよ、その奇矯さをむしろ怪奇なまでに強調している。このような寒山の人間像が作り出されたのは、実は彼についての伝説がその背景になっている。

いま私は「伝説」と言ったが、実のところ、この寒山という人物が果して実在したかどうかは、まったく不明であつて、その実在を証明する確かな材料は何ひとつないのである。従来は、唐の初め、七・八世紀ごろの人とされていたが、もちろんそれも確かな史実の裏づけがあるわけではない。現に、その詩のなかには、八世紀以後の事がらや語彙を用いたものが少なくないのである。

寒山の伝説として最も早いものは、いま「寒山詩集」の巻頭に見られる閻丘胤りやまけういん（閻丘が姓）の序であつて、彼は実際に寒山と拾得と豊干ぶかんを知り、そのふしぎな言行をみずから見聞した人として、それらの話を伝記ふうに綴っている。のみならず、彼等が残した詩を蒐集して詩集を編んだとも述べている。しかし、

彼等がいつの時の人であるかについては、なにも語っていない。第一、当の閻丘胤という人物が、これまた果して実在した人なのかどうか、すこぶる怪しいのである。「寒山詩集」の序では、彼に堂々たる肩書が附いていて「朝議大夫・使持節台州諸軍事・守刺史・上柱国・賜緋魚袋」とある。この肩書自体は、今はこまかい穿鑿ははぶくけれども、唐代の官制から見ても、べつに不自然な点はない。しかし、これほどの高い肩書がありながら、この人の名は唐代のどの文献にも現われない。これは甚だ不可解なことである。

もっとも、彼と似た名をもつ人に閻丘均（まへやうきん）という人物があり、「歷代法寶記」では、禪宗第五祖の弘忍（こうにん）禪師の碑文を撰した人として、また杜甫（ふ）の「花卿の歌」の古注には、東蜀の牛頭山（ごず）の麓に存する「瑞聖寺磨崖碑」の文を撰した人として、この人の名を挙げている。この閻丘均は八世紀の初めごろ実在した人であるが、しかし、右のような肩書をもった形迹は全くない。結局いずれにしても、閻丘胤という人物が実在したとは認めにくいのである。しかもその「序」は、伝記ふうとはいっても、相当に神話化された記述であって、すでに寒山を文殊菩薩の、捨得を普賢菩薩の化身と見なしている。

その後の文献に見える寒山の話は、すべてこの閻丘胤の「序」に本づいたものばかりだといっている。わが森鷗外の「寒山拾得」にしてもそうである。もっとも、それらの文献の性質によって、多少の潤色が加わることはある。例えば、「祖堂集」巻十六や、「宋高僧伝」巻十一では、瀉山（いさん）禪師（七七一一—八五三年）が天台山で寒山に会ったことを述べたり、「古尊宿語録」巻十四や、志南（しなん）の「天台山国清禪寺三隱集記」では、趙州和尚（じょうしやう）（七七八—八九七年）も彼に会って問答をしたことになっている。そしてこれらの例を通じて分ることは、寒山と禪僧との交渉が増えてきていること、および彼の年代が九世紀へ引き下げられていることである。

もつとも、私は閭丘胤の「序」なるものを、それほど古いものとは認めない。恐らく唐の末か五代のころ（九—十世紀）の擬作だろうと考える。だから右の諸例は、寒山を九世紀へ引き下げたというよりも、もともと彼をその頃の人と見るのが宋代一般の通念だったことを示すのではないかと思う。右に挙げた文献のうち、「祖堂集」は九五二年の編纂であるから、このような通念の形成は、更に五代にまで遡ることになる。そのことは、また次ぎの例からも言える。

五代の時の有名な道士杜光庭に、「仙伝拾遺」という著書があり、そのなかに、寒山が大暦年間（八世紀後半）に天台山に隠棲していたこと、その詩を天台の道士の徐靈府（九世紀初めの人）が三巻の詩集に編み、且つ序を書いたと述べている。この書物の内容がすべて史実として信用できるものではないにしても、右の記事は、五代の人が寒山について抱いていた観念の一斑を物語っていると思われる。そしてここでは、寒山は仏教よりも道教の世界の人として設定されているが、その点については、あとで天台山の歴史を述べる時に再説することとする。

もう一つ右の記事によって分ることは、寒山という隠士の実在性を、すでに五代の人が信じていたということである。それは単なる歴史人物としての実在性でなくて、達道の士としての宗教的な景仰に支えられた実在性である。そのような敬慕の念においては、もはや彼についての歴史的な穿鑿などは無用のことであろう。ことにそれが霊地としての長い歴史をもつ天台山との因縁に結ばれ、その宗教的雰囲気に育くまれていたことは、そのような景仰の念を側面的に強く支えるものであったろう。五代の時の詩僧として有名な禪月大師貫休（八三二—九一二年）の詩にも、寒山に対するそのような崇敬を示しているものがある。「赤松の舒道士に寄す」という詩がそれである（禪月集、卷十一）——

不見高人久

高人に見わざること久しく

空令鄙悒多

空しく鄙悒をして多からしむ

遙思青嶂下

遙かに青嶂の下を思えども

無奈白雲何

白雲を奈何ともするなし

子愛寒山子

子は寒山子を愛して

歌唯樂道歌

歌うは唯だ樂道歌のみ

会応陪太守

会らず応に太守に陪して

一日到煙蘿

一日は煙蘿のところに到るべし

これは貫休が、赤松山に隠棲する親友の舒道士を懷かしみ、久しく会うことのできぬ残念さを訴え、いずれは太守のお供をして、あなたの白雲の郷を訪ずれたいと願っている、というのである。赤松山は天台山に程近く、古くから道家の聖地の一つとして名高い。その舒道士が、日ごろから寒山子を愛し、その樂道歌を愛誦しているというのである。ここには、あの閭丘胤が語ったような神話はまだなく、ただ山中に幽居して道を楽しむ高風の士として、しかも現実の舒道士の居る境地との親近さの中に寒山を置いている。そしてこれが寒山という人物像の本来の——神話的・宗教的に潤色される以前の姿の、少なくとも一面を示すものではないかと、私は考える。そして現在の「寒山詩集」に、「道を楽しむ歌」が相当にたくさん存することは、あとの本文篇で見られる通りである。また唐代の禅僧、例えば道吾和尚や懶瓚和尚などにも同じく「樂道歌」の作があることを、ここに考え合わせてよいであらう。

しかし右に述べた点は、「少なくとも一面」であるにすぎない。けっして寒山の全貌を示すものではない。従来の寒山に対する観念、特に日本人の抱くそれは、いま右に述べたような一面だけに強いアクセントを置きがちであった。禪家における取り上げかたは別問題としても、とかく日本人は昔から寒山像を南画風な世界のなかに設定したがる癖がある。このことは、実は特に寒山だけに限ったことではなく、古い中国について日本人が描く観念には、しばしばアクを抜き去って、さらりとしたものに仕立ててしまう癖があるように思われる。それが日本人の好みに合うのかも知れぬが、しかし私の見るところ、中国人はなかなかアクの強い、脂あぶらっこい面をもっているのである。寒山もけっして妙に悟りすましたような隠者なのではない。その詩集を読むと、なまの人間的な悩みの告白や、隠者であることへの懷疑さえ見られるし、また逆に隠者としての自分を誇示し、俗人やエセ坊主を嘲罵したり、あるいはまた肉食や財慾を懇懇と戒める説教者としての口吻もはなはだ多い。神仙への憬がれが示されているかと思うと、それを排斥し輕蔑する反面も強いし、また一方では、純然たる一箇の禪僧として、高遠な理法を説いている詩も少なくない。そしてまた一方、純粹にひとりの詩人として、自然と人生の美しさや愉しさを歌い上げている作品も存在するし、それらのなかには、なかなか格調の高い佳品も見出される。

このように、寒山の詩の内容はすこぶる雑多である。それを一人の作者の制作として統一しようとしても、そこには多くの無理が伴なう。古来の日本の注釈家は、これらの詩をすべて宗教的意味において、というよりは、もっぱら禪的境地へ引きこんで理解しようとしているが、しかし、そこにははなはだ牽強で不自然な解釈や、あきらかな誤解などがしばしば見出される。つまり、そのような解釈だけでは作品自体が言うことをきかぬ、という場合がけっして少なくないのである。私はこれらの詩を強いて統合的に把え

る必要はないと考える。というのは、この詩集の作者を誰か或る一人に限定することが困難だけでなく、その作者と伝えられる寒山についても、詩集とは別箇に、彼についての説話の発展が考えられるからである。

この点については、かつて津田左右吉氏が「寒山詩と寒山拾得の説話とについて」という論文で、その詩の思想的内容の検討を通して、こまかく解説されたことがある（『饗宴』創刊号、のち「シナ仏教の研究」に収む）。確かに氏も言われるように、その説話の発展に伴って、それに応ずる詩があとから附け加えられていったらしい痕迹も認められるのである。天台の国清寺との関係や、拾得・豊干との交渉などを語る詩は、恐らくこのような過程での潤色を示すものであろう。禅僧の偈（ガ）と異るところのない詩のなかにも、やはり後出のものが含まれているだろうと思われる。それは、彼の人間像が神秘化されるに随って、そのような神人の語として似つかわしいように高い象徴性が与えられることになったのであろう。

しかしながら、彼の現存の作品をその人間像の展開と対応させつつ発展史的に述べるということは、とうてい厳密にはできないことである。散文ならばともかく、これは韻文であり、しかも全体として象徴的な作品が多く、そしてどの詩も題がないのである。題はむしろ読者じしんによって与えられるべき性質のものであろう。

ここで私は、ウェイリ氏による寒山詩の解説を引用したい。言うまでもなく、ウェイリ氏は東洋文学研究者として高名な英国の学者であり、わが国では「源氏物語」や「枕草子」などの翻訳で知られているが、また李白や白居易の評伝、その他多くの中国の詩の名訳がある。

シナの詩人寒山は八・九世紀の人である。彼とその兄弟は親譲りの田地を耕やしていた。しかし彼